「父の家」（神の家族 *Familia Dei*）
――ヨハネ福音書における「家族」メタファーとその意味――

三浦　望

I.　序

拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」[1] において、「神殿モティーフ」が基本的にキリスト論的モティーフであり、復活のキリストがエルサレム神殿の様々な神殿祭儀の機能を持ち合わせ、かつこれを凌駕するという神学的主張が含まれていることを明らかにした[2]。しかし、「父の家」で表象される一連の箇所（ヨハ 2:16; 8:35; 14:2）の解釈は課題として残された。「父の家」という表現は、キリスト論的な神殿モティーフとは異なり、前回の論考では「家族的なメタファーを用いたひとつの神殿モティーフの変奏と見做すことができよう」[3] と結論付けた。しかし、「家」（οἶκος）のメタファーを詳細に見ていくと、神殿モティーフの枠を超えて、別のメタファー群にたどり着く。神殿モティーフが、主にイエスの在りようを描き出すものであるのに対して、この「家」のモティーフ（メタファー）は――神殿モティーフと部分的に重複しつつ――神（父）とイエス（息子）と信従者たちの関係を存在論的・機能的に表現するメタファーのネットワークを構成するように思われる。本論考ではこれを「家族」メタファーと呼び[4]、その機能と内テクスト構成（内テクスト性、intratextuality）を考察する[5]。（先行研究および「メタファー」については、注 4）および 5）を参照のこと。）

II. 「家族」メタファー

まず、ヨハネ福音書における「家族」メタファーに関連する語句を列挙してみたい。

「家族」メタファーに関連する語句

*「家」(οἶκος)[6]: ヨハ 2:16 [x2], 17; 7:53; 11:20; 14:2// (οἰκία): ヨハ 4:53; 8:35; 11:31; 12:3; 14:2.

*「父」(神): (πατήρ): ヨハ 1:14, 18; 2:16; 3:35; 4: 21, 23 [x2]; 5:17, 18, 19, 20, 21, 22, 23 [x2], 26, 36 [x2], 37, 43, 45; 6:27, 32, 37, 40, 44, 45, 46 [x2], 57 [x2], 65; 8:16, 18, 19 [x3], 27, 28, 38, 42, 49, 54, 56; 10:15 [x2], 17, 18, 25, 29 [x2], 30, 32, 36, 37, 38 [x2]; 11:41; 12:26, 27, 28, 29, 49, 50; 13:1, 3; 14:2, 6, 7, 8, 9 [x2], 10[x3], 11 [x2], 12, 13, 16, 20, 21, 23, 24, 26, 28 [x2], 31 [x2]; 15:1, 8, 9, 10, 15, 16, 23, 24, 26 [x2]; 16:3, 10, 15, 17, 23, 25, 26, 27 [x2], 28 [x2], 32; 17:1, 5, 11, 21, 24, 25; 18:11; 20:17 [x3], 21.

*「独り子(〔神の〕唯一の子)」(μονογενής): ヨハ 1:14, 18; 3:16 (ὁ υἱός ὁ μονογενής), 18 (ὁ μονογενής υἱός τοῦ θεοῦ).

*「子」(息子 = イエス) (ὁ υἱός): ヨハ 3:16, 17, 18, 35, 36 [x2]; 5:19 [x2], 20, 21, 22, 23 [x2], 26, 27; 6: 40; 8:35, 36; 14:13; 17:1 [x2], 12; 19:7.

*「神の子」(ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ): ヨハ 1:34, 49; 5:25; 10:36; 11:4, 27; 19:4, 27; 19:7; 20:31.

*「子」(信従者) (τέκνον)[7]: ヨハ 1:12; 8:39 (「アブラハムの子」); 11:52// (τεκνίον)[8]: ヨハ 13:33// (παιδίον)[9]: ヨハ 21:5.

ヨハネ福音書は神学的焦点がキリスト論に収斂する。このキリスト論で特徴的であるのは、「父である神」の啓示をイエスが顕わしていることである。上記の表からもわかるように、共観福音書と比較しても、神を「父」と呼ぶ

頻度は、ヨハネ福音書が抜きん出て高い（Cf. マコ 4 回、マタ 23 回、ルカ 6 回、ヨハ 107 回）。「父子関係」で表現される神とイエスの関係性は、紛れもなくヨハネ福音書において独自なものとなっている。また、ヨハネ文書でイエスに対して使用される「独り子」[10] や、「息子（子）」（υἱός）をイエスのみに用い、「子」と信従者が呼ばれる時の「子」（τέκνον）と区別する用法など、ヨハネ福音書独自の使用も明らかである。

以上を踏まえ、本論考で取り上げるヨハネ福音書の箇所の次の通りである。ただし、語句として「家」・「家族」に関連するものを含まなくても、家族のイメージを提示する箇所はあるので（ヨハ 13:2-10; 19:26-27）、それらをも含めることとする。

- ヨハ 1:12-13 「神の子供たち」
- ヨハ 2:16 「わたしの父の家」
- ヨハ 3:3-10 「上から生まれた」
- ヨハ 8:35-36（8:31ff）「奴隷」対「息子」
- ヨハ 11:50-52 「散らされている神の子供たちを集めるため」のイエスの死
- ヨハ 13:2-10 「父の家」への歓迎（迎え入れ）
- ヨハ 14:2- 3, 23 「わたしの父の家にはたくさんの部屋がある」
- ヨハ 19:26-27 十字架の下での愛弟子とイエスの母
- ヨハ 20:17 「わたしの父のところ、あなたがたの父のところ、わたしの神のところ、あなたがたの神のところに」

II-1. ヨハ 1:12-13 「神の子供たち」

> 12 しかし、彼を受け入れた人々、彼の名を信じる人々には、神の子供たちとなる権能を与えた。13 彼らは、血からでなく、肉の意志からでもなく、神から生まれたのである。[11]

[12] ὅσοι δὲ ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ, [13] οἳ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ θελήματος ἀνδρὸς ἀλλ" ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

ヨハネ序文において、イエスを受け入れた人々（信従者たち）が「神の子供たちとなる」（τέκνα θεοῦ γενέσθαι）と宣言されている（1:12）。「子供たち」という表現から「家族」メタファーを看取することができる。この背景として、ユダヤ教において「神」と「イスラエル」の親しい関係性を「父子関係」として表現してきた伝統がある（出エ 4:22、申 8:5、ホセ 1:10、イザ 63:16、詩 103:13 他）。同じ表現は、第二神殿時代のユダヤ文学にも見られ（Cf. 知恵 5:5、ソロ詩 17:27、シビュラ 3:702-704、ヨベル 1:28）、それがヨハネ福音書にも受け継がれている。

人間が「神の子供」――世界創生の「父」である最高神の「子供」としての人間――であるという考え方は、広くギリシア思想にも見られる（Cf. ホメーロス *Iliad*. 2.371; 3.2761; 6.458、*Odys*. 14.440、ヘシオドス *Theog*. 457, 468, 542、*Op*. 59, 169 他。また、使 17:28-28 も参照）。ヨハネ序文は、創世記 1 章を下敷きとしているので、創造主としての神が「父」であるのならば、その父によって――また、創造においてロゴス・キリストの介在を通して（ヨハ 1:3）――創られた人間は「神の子供たち」であるという主張も可能であろう。ここでは、父子関係という表現を通して、キリストを信じる者たちが、神との極めて親しい愛の関わり（交わり）を持つことが、福音書冒頭から宣言されていると言える（Cf. I ヨハ 1:3; 3:1-3）。

他方、福音書の要約と言われるヨハネ序文は、1:10-13 において、イエスの到来によってこの世の人々が、イエスを受け入れない（οὐ παραλαμβάνω）人々（1:11）と、イエスを受け入れる（λαμβάνω）人々（1:12）とに二分されることを語る。イエスを受け入れ、「神の子供たちとなる」（τέκνα θεοῦ γενέσθαι）信従者たちが形成される一方で（ヨハ 1:12-13）、彼を受け入れな

い人々が生じることが述べられている（1:10-11）。イエスの信従者が「神の子供たちとなる」ことが序文で宣言されていることは重要である。ヨハネ序文は福音書全体の要約として機能するので、ここでの宣言は実際、ヨハネ福音書ナラティヴにおいてそのプロット展開を見る。福音書ナラティヴ部分では、イエスによる神の啓示・ユダヤ人による拒絶が福音書前半部（1-12 章）で描かれ、また人々の受入れ（弟子たちへの教え［13-17 章］）／拒否（殺害［18 章以降］）が後半部（13-20 章以降）で物語られる[12)]。そして、福音書ナラティヴ全体を通して最終的に目指されているのは、イエスの信従者たちが「神の子供たちとなる」ことであり、それが福音書冒頭から高らかに謳われているのである。

同時に、ヨハ 1:12 では、「彼（イエス）を受け入れた人々」が、「その名を信じる人々（τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ）と言い換えられている（Cf. 2:23; 3:28）。イエス（または父）の「名」（τὸ ὄνομα）については、告別説教――特に、ヨハ 17 章――で集中的な使用が認められる[13)]。福音書の中で信従者たちは、イエスの名によって父に願うことができ（14:13-14; 15:16; 16:23）、イエスの名のために迫害を受けるかもしれないが（15:21）、彼の名によって永遠の命を得ている（20:31）と言われている。他方、イエス自身は、父の名によってこの世に来（5:43; 12:13; 17:11-12）、父の名によって働き（10:25）、父の名に栄光を帰し（12:28; 17:6, 26）、また、父の名を信従者たちに知らしめ（17:6, 26）、父の名によって彼らを守る（17:11-12）。「イエスを受け入れた人々」が「その名を信じる人々」と同定されることにより、序文と終結部との間に対応関係が存在することがわかる。序文において宣されたことが、福音書の第一終結部（ヨハ 20:30-31、福音書の書かれた目的）において強調されているのである。

> ヨハ 20:31　以上のことが書き記されているのは、あなた方が、イエスが神の子キリストであることを信じるようになるためであり、信じることにより、その名のうちにあって命を持ち続けるためである。（ταῦτα δὲ

γέγραπται ἵνα πιστεύ[σ]ητε ὅτι Ἰησοῦς ἐστιν ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ, καὶ ἵνα πιστεύοντες ζωὴν ἔχητε ἐν τῷ ὀνόματι αὐτοῦ.)

つまり、ヨハ 1:12-13 と 20:31 は、ナラティヴ全体の枠組みとなる「囲い込み」*inclusio* を形成しているのである。こうして考えると、「神の子供たちとなる」ということは、イエスの名によって「永遠の生命」を持つということを意味している。それは言うなれば、同じ父に属する「家族・家」の生命を共に分かち合うということである。

II-2.　ヨハ 2:16 「わたしの父の家」[14)]

> 16 そして、鳩を売っていた人々に言った、「これらのものをここから取り去れ。わたしの父の家を商売の家にするのはやめろ。」
> 16 καὶ τοῖς τὰς περιστερὰς πωλοῦσιν εἶπεν· ἄρατε ταῦτα ἐντεῦθεν, μὴ ποιεῖτε τὸν οἶκον τοῦ πατρός μου οἶκον ἐμπορίου.

エルサレム神殿でのイエスの粛清行為（ヨハ 2:13-22）は、終末論的な象徴的行為としてヨハネは描いている（Cf. 背景としてのゼカ 14:21）[15)]。ここでは、イエスの体（復活のキリスト）こそが真の神殿であるという主張がなされている（ヨハ 2:20-21）。すなわち、復活のキリストはエルサレム神殿を凌駕するという主張がなされているのである（Cf. ヨハ 4:21 場所にとらわれない父の礼拝や、14:2 イエスのうちにある「父の家」）。

同じ神殿粛清の場面におけるイエスの言葉（2:16）を「家族」メタファーの観点から考察してみたい。ここでイエスは神殿を「わたしの父の家」（τὸν οἶκον τοῦ πατρός μου）と呼ぶ（Cf. ヨハ 2:17「あなたの家に対する熱情」）。ヘブライ語聖書では伝統的に神殿を「神の家」（בית אלהים, ὁ οἶκος τοῦ θεοῦ）と表現してきた（Cf. 創 28:17, 19、師 17:5; 18:31、サム下 12:20 他多数。新約でもマコ 2:26、ルカ 2:49 を参照のこと）。共観福音書の並行箇所

と比較しても（Cf. マコ 11:17、マタ 21:13、ルカ 19:46。いずれもイザ 56:7 の引用）[16]、ヨハネだけが「わたしの父の家」という言葉をイエスに語らせている。従って、ここにはヨハネ独自の「神殿」（礼拝）理解、ひいてはイエスと神との深い関わりが示唆されていると言えよう（Cf. ヨハ 10:30）。「わたしの父の家」という表現を含めたイエスによる神殿粛清の行為は、「神の独り子」としての象徴的行為なのである。

ヨハネ福音書の中で、この独特な神（父）とイエス（独り子、息子）の関わりは、「派遣する者」（わたしを送った者 ὁ πέμψας με）である父と「派遣された者」であるその独り子、イエスというヨハネ固有の「派遣神学」を基軸に展開する[17]。ヨハネ福音書における「派遣神学」はキリスト論の基底をなし、ἀποστέλλω（派遣する）、πέμπω（送る）がいずれも שׁלח（遣わす、送り出す）のギリシア語訳であるところからもわかるように[18]、ヘブライ語聖書――特に預言者（Cf. イザ 6:8-9; 61:1-2 他）――の伝統の中にある「遣わされた者」（agency）の概念があると指摘されている[19]。「父はわたしより偉大」（ヨハ 14:28）であるが、「わたしと父とはひとつである」（ヨハ 10:30）と言われるほど、働き・行い・在りようにおいて、神とイエスはひとつ（ἕν）[20]である。神とイエスがひとつであることは、福音書後半部で「愛の相互内在」関係として提示され、特に、告別説教において、その愛の相互内在関係が繰り返し説かれるのである。そして、イエスの信従者たちも、この愛の相互内在関係の中に内包されることが強調されている。父子関係という家族の中に、イエスの信従者たちも組み込まれ、同じ家族関係（家）の中で愛の関わりに入るのである。

ヨハネ福音書におけるこうした「家」や父子関係を示す語句の使用から、この関係が神である父をその主とする「神の家族」（*familia Dei*; household of God）を想定していることがわかる。序文で宣言されたように（ヨハ 1:12-13）、この「父の家」で示唆される神の家族に、イエスの信従者が「神の子供たち」として包含されるのである。ヨハネ福音書のプログラミックなテーマを提示する 2 章において[21]、「父の家」に対するイエスの熱情が示され（ヨハ

2:17 参照)、派遣された「息子」であるイエスが、「世」にある信従者たちを「子供たち」として、この家族的な関わりの中に招き入れることが示されるのである。

II-3.　ヨハ 3:3-8「上から生まれた」

3 イエスは答えて彼に言った。「アーメン、アーメン、あなたに言う。人は上から生まれなければ、神の国を見ることはできない。」…… 5 イエスは答えた、「アーメン、アーメン、あなたに言う。人は、水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない。6 肉から生まれたものは肉であり、霊から生まれたものは霊である。7『あなたがたは上から生まれなければならない』とあなたに言ったからといって驚くことはない。8 風は吹きたいところに吹き、あなたはその音を聞く。しかし、それがどこから来てどこへ往くのかわからない。霊から生まれている人は皆このようである。」

3 ἀπεκρίθη Ἰησοῦς καὶ εἶπεν αὐτῷ· ἀμὴν ἀμὴν λέγω σοι, ἐὰν μή τις γεννηθῇ ἄνωθεν, οὐ δύναται ἰδεῖν τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ. … 5 ἀπεκρίθη Ἰησοῦς· ἀμὴν ἀμὴν λέγω σοι, ἐὰν μή τις γεννηθῇ ἐξ ὕδατος καὶ πνεύματος, οὐ δύναται εἰσελθεῖν εἰς τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ. 6 τὸ γεγεννημένον ἐκ τῆς σαρκὸς σάρς ἐστιν, καὶ τὸ γεγεννημένον ἐκ τοῦ πνεύματος πνεῦμά ἐστιν. 7 μὴ θαυμάσῃς ὅτι εἶπόν σοι, Δεῖ ὑμᾶς γεννηθῆναι ἄνωθεν. 8 τὸ πνεῦμα ὅπου θέλει πνεῖ καὶ τὴν φωνὴν αὐτοῦ ἀκούεις, ἀλλ᾽ οὐκ οἶδας πόθεν ἔρχεται καὶ ποῦ ὑπάγει· οὕτως ἐστὶν πᾶς ὁ γεγεννημένος ἐκ τοῦ πνεύματος.

「生まれる」という誕生イメージは、明らかに「家族」メタファーのひとつであろう。家族メタファーの関連において、ヨハ 3:3-8 は、1:12-13 のテー

マ的敷衍もしくは展開部分と見做すことができる。同じ誕生イメージや繰り返される「生まれる」という語句の共通性によって、3:3-8 が 1:12-13 と関連づけられている（γίνομαι [1:12//3:9] および γεννάω [1:13// 3:3, 4 (x2), 5, 6 (x2), 7, 8]）。ここでは、1:12-13 の敷衍として「神の子供たち」の在りようが、ヨハネ福音書のキーワードを孕みながら、より具体的に描かれている。「上から（新たに）[22] 生まれる」（γεννηθῇ ἄνωθεν）は、「霊から生まれる」と並行し、1:13「神から生まれる」をさらに敷衍している。「上から」生まれる（ἄνωθεν, ヨハ 3:31; 19:11, 23）、「水と霊によって」生まれる（3:5, 8）、「霊から」生まれる（3:6, 8）など、福音書の中でさらに具体的エピソードとして展開する内容のキーワードである「水」[23] や「霊」[24] が、このテクスト内に凝縮されていることに注目したい。「上から生まれる」（3:3）は、「水と霊によって生まれる」（3:5）と敷衍されるが、このテーマは神殿モティーフの論考で見た通り、ヨハネ福音書の中で発展・展開されている[25]。

ここでのイエスとニコデモの会話は、ヨハネ福音書の二元論的イメージを

belonging to God（神から）		
上から	ἄνωθεν	3:3, 7, 31;(8:27); 19:11
霊から	ἐκ τοῦ πνεύματος	3:6, 8
天から	ἐκ τοῦ οὐρανοῦ	3:13, 27, 31; 6:31, 32, 33, 41, 42, 50, 51, 58; 12:28
父から	ἐκ τοῦ πατρός	6:65; 10:32; 16:28
神から	ἐκ τοῦ θεοῦ	7:17; 8:42, 47
ここから…ではない	οὐ ... ἐτεῦθεν	18:36
世から…ではない	οὐ ... ἐκ του κόσμου	8:23; 15:19; 17:14, 16

belonging to Devil（悪魔から）		
肉から	ἐκ τῆς σαρκὸς	3:6
地から	ἐκ τῆς γῆς	3:31; 12:32
悪魔である父から	ἐκ τοῦ πατρὸς του διαβόλου	8:44
世から	ἐκ του κόσμου	15:19; 17:6, 15
下から	ἐκ τῶν κάτω	8:23

図 1

総括している（前頁図 1 参照）。福音書ナラティヴでは、神に属する者と、そうでない者との対比が対照的な――水平的（horizontal）なものと、垂直的（vertical）なものを含む――イメージで表現されるが、ヨハネ的二元論のキーワードを含む 3 章の「上から生まれる」が、こうした二元論的イメージを統合する。この「上からの誕生」は、信従者たちがまったく異なる現実――神の現実――における存在へと変容することを示し、それを「永遠の生命を持っている」または「死から命へと〔すでに〕移ってしまっている」（5:24）と表現するのである。ヨハネ福音書で人々の出自（アイデンティティ）を表現する特徴的な ἐκ は、信従者のアイデンティティが神そのものにあることを示す。それは、悪魔に属すると言われる人々と対照をなす。また、「できる」δύναμαι (οὐ δύναται [3:3, 5], πῶς δύναται [3:4], μὴ δύναται [3:4]) という動詞が否定形または疑問形で何度も繰り返されることにより、イエスが語る事柄が「予想外」なことであることが強調されている。そして、イエスが「イスラエルの教師」であるニコデモ（3:10）と対話することにより、それが一層際立つよう配慮されているのである。

さらに特筆すべきは、「神の国」（ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ, ヨハ 3: 3, 5）という概念が、会話を通じて「永遠の生命」（ζωὴ αἰώνιος, 3: 15, 16, 36 [x2]）に置き換えられてくことであろう[26)]。ヨハネ福音書において「神の国」のモティーフが後退し、キリスト論が中心を占めていることはよく知られているが、3 章では「神の国」に代わるヨハネ的モティーフである「永遠の生命」が提示されている。概念の置き換えは、救済理解（イメージ）そのものの変容を表し、ヨハネ福音書における救済とは、「生命の与え主」（ζωοποιέω, ヨハ 5:21）であるイエスによって信従者が「永遠の生命」を得ることであること、またこの「永遠の生命」という賜物こそがヨハネ的救いの現実であることが端的に示される。それは、既に見たように、ヨハ 1:12-13 と 20:31 との「囲い込み」によって強調されている主張とも重なるのである。

「生まれる」という誕生イメージは、信従者が「どの家の者であるか」―信従者が誰に属する者であるか―という自らの出自を描き出している。この「家

族」メタファーは、信従者たちが、イエスを通して、父である神から与えられている生命に、同じ家族に属する「神の子供たち」も与かることを提示している。この家族に属する者となるためには、人は「上から―神から（1:13）―生まれ」なければならないのである（ヨハ 3:7 を参照のこと）。

II-4.　ヨハ 8:35-36（ヨハ 8:31-59）「奴隷」対「息子」

> 35 奴隷はいつまでも家に留まるものではない。子が永遠に留まるのである。36 それで、子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは現実に自由の身となるであろう。
> 35 ὁ δὲ δοῦλος οὐ μένει ἐν τῇ οἰκίᾳ εἰς τὸν αἰῶνα, ὁ υἱὸς μένει εἰς τὸν αἰῶνα. 36 ἐὰν οὖν ὁ υἱὸς ὑμᾶς ἐλευθερώσῃ, ὄντως ἐλεύθεροι ἔσεσθε.

ヨハ 7:1-8:59 は、スコットと呼ばれる仮庵祭（「天幕の祭」）を舞台とした神殿論議として知られている[27)]。この神殿論議の中で、イエスとユダヤ人（敵対者たち）との論争が繰り返されるのであるが、8 章の議論の中心テーマは、「誰が父であるか」に集約される。神が父であるイエスは（8:16, 26, 29）、自らの父である神を証しし（8:18）、父が言うとおりに語り、そして行う（8:29）。他方、イエスの敵対者である「ユダヤ人」たちは、アブラハムが自らの父であるとし（8:39）、また、神が父であると主張する（8:41）。前述の 3 章同様、自らの「父が誰であるか」によって、その人の出自・所属・本性（アイデンティティ）がわかるということが前提とされている。すなわち、この論議の中で、「神から」（ἐκ τοῦ θεοῦ, 7:17; 8:42, 47）の者であるか、あるいは「悪魔である父から」（ἐκ τοῦ πατρὸς του διαβόλου, 8:44）の者であるかが明確になるのである。例えばイエスは、「お前は何者なのだ」（8:25）という敵対者からの問いに対して、「わたしを派遣した方は真実であり……」（8:26）と答えているが、これは父ご自身を示すことがイエス自身のアイデンティティ

を語ることとなることを端的に示している。（しかし、これに対して敵対者たちは、「父のことを語っていることを彼らは知らなかった」（8:27）と無理解を示す。）また、イエス自身も敵対者たちの主張に対して、彼らが「わたし（イエス）もわたしの父も知らない」（8:19）とし、彼らが「罪のうちに死に」（8:21, 24）、「下のもの……この世に属し」（8:23）、「悪魔である父から出て来た者」（8:44）であると厳しく断罪している。

こうした一連の議論の後で、上記引用のテクストに至るのであるが、ここでは「奴隷」（ὁ δοῦλος, ヨハ 8:34, 35; 13:16; 15:15 [x2], 20）と「子」（息子、ὁ υἱός）が対比的に用いられている。イエスを信じない者たちが「罪」のうちにあり（8:24）、「罪の奴隷」（8:34）であると言われているところからもわかるように、イエスの敵対者たちは基本的に罪への隷属状態にある「不自由」さを呈しており（8:32）、イエスの言葉に留まることによって（8:31）自由にされる必要があることが示されている。ヨハネ福音書において、「罪」とはイエスの啓示を信じない不信仰のことであるので[28)]、ここでは明らかに不信仰者が「奴隷」として描かれている。家に永遠に留まる「息子」（＝イエス）のみが、この隷属状態を解消し自由にする権限を持つのである。

ヨハ 8:31 以降、イエスは自分の言葉に「留まる」者たちが得る「真の自由」について語る（8:31-32）。息子が永遠に家に留まるわけだが、「留まる」（μένω, ヨハ 8: 31, 35[x2]）は、ヨハネ神学で重要なキーワードである。この動詞は告別説教で―特に、15 章において―集中的に使用されており（Cf. ヨハ 14:10, 17, 25; 15: 4 [x3], 5, 6, 7 [x2], 9, 10 [x2], 16）、それは――ἐν（～のうちに）と共に――神である父とイエス（息子）、そして信従者である「神の子供たち」の相互内在を表現する言葉である。μένω は、「留まっている」という状態の説明ではなく、本来あるべき場所に居続けるという主体性を問題にしている意味合いを持つ。また、語彙の使われ方を見ると、8:35-36 は、ヨハ 15 とかなり関連していることがわかる。また、「永遠に」（εἰς τὸν αἰῶνα）もヨハネ特有の表現であり、「いつまでも、無限に」という意味で用いられ（Cf. ヨハ4:14; 6:51, 58; 8: 35 [x2], 51, 52; (9:32); 10:28; 11:26; 12:34; 13:8;

14:26)、「（永遠の）生命」との関わりで使用されることが多い（Cf.「永遠に生きる」6:51、「決して死なない」6:58; 8:51, 52; 10:28; 11:26)。従って、こうした語彙的関連から見ると、8:35-36 において「家に永遠に留まる」とは、父と子と神の子供たちが愛の相互内在関係にありつつ、本来あるべき場に属し、子供たちが救いの現実として「永遠の生命を持つ」ということを示唆しているのではないだろうか。（また、14:2 との関連は後の議論を参照。）

上記の箇所において、「父の家」（家、household）に永遠に留まる者である息子＝イエスが、「あなたがた」（この文脈ではイエスの言葉を信じたユダヤ人）を解放するなら、「あなたがた」は真にイエスの弟子であり（8:31)、自由となる（8:36）と言う。それは、不信仰という罪からの解放という意味での「真の自由」であろうか。信従者（弟子）となることが「子」となる事と同定されていることにも留意したい。「留まる」μένω をいう動詞が告別説教（特に 14-15 章）で、信従者である弟子たちとイエス・神との特別な相互内在関係を示すために使用される語句であることを考えると、ここで言われている内容は、単にユダヤ人たちに向けた議論を超えて、イエスの信従者たちが最終的に「父の家」に永遠に留まる者たち――すなわち、神の子供たち――であることが示唆されているように思われる。イエスを信じる者たちは、ヨハネ的罪から解放され（その意味で真に自由)、「父の家」に永遠に留まることができる。それは、同じ家族の生命――永遠の生命――によって生かされることを意味するのである。

また、敵対者に対してイエスは「あなたがたは自分の父と同じ「業」を行っている」（8: 41, Cf. 8:39）という。ここでは、イエス自身が自らの父の業を行うように、息子は本来「自分の父」と同じ業を行うことが前提とされている。それならば、「神の子供たち」である信従者たちもまた、「父である神」の家族としてその家の業（家業 family business）を行うことも示唆されている。

II-5.　ヨハ 11:50-52「散らされている神の子供たちを集めるため」のイエスの死[29)]

> 50「ひとりの人間が民のために死んで、民族全体が滅びないですむことが、自分たちにとって得策だということを、あなたがたは考えようともしていない。」51 彼はこれを自分から言ったのではなく、その年に大祭司であったため、イエスがこの民族のために死ぬことになると預言したのである。52 この民族のためだけでなく、散らされている神の子供たちをもひとつに集めるために〔死ぬことになっていたのである〕。
> 50 οὐδὲ λογίζεσθε ὅτι συμφέρει ὑμῖν ἵνα εἷς ἄνθρωπος ἀποθάνῃ ὑπὲρ τοῦ λαοῦ καὶ μὴ ὅλον τὸ ἔθνος ἀπόληται. 51 τοῦτο δὲ ἀφ᾽ ἑαυτοῦ οὐκ εἶπεν, ἀλλὰ ἀρχιερεὺς ὢν τοῦ ἐνιαυτοῦ ἐκείνου ἐπρο-φήτευσεν ὅτι ἔμελλεν Ἰησοῦς ἀποθνῄσκειν ὑπὲρ τοῦ ἔθνους, 52 καὶ οὐχ ὑπὲρ τοῦ ἔθνοῦ μόνον ἀλλ᾽ ἵνα καὶ τὰ τέκνα τοῦ θεοῦ τὰ διεσκορπισμένα συναγάγῃ εἰς ἕν.

上記引用箇所は、祭司長たちとファリサイ派の人々によって招集された最高法院にて大祭司カイアファがイエスの死について語った言葉であり、「神殿モティーフ」においてもイエス殺害を謀る「場」としての神殿という意味で取り扱った[30)]。大祭司の口を通して、しかも本人が意図せずして、イエスの死の効力が預言として述べられているところは、ヨハネ特有のアイロニーであろう。また、「その年の大祭司」が預言的力をもち合わせるという伝承をヨハネ福音書記者が知っていたことも窺わせる[31)]。こうして大祭司カイアファは、イエスの死が「散らされている神の子供たち」（τὰ τέκνα τοῦ θεοῦ τὰ διεσκορπισμένα）を「ひとつに集める」（συνάγω εἰς ἕν）ためのものであることを宣言する。「散らす」（διασκοπίζω）という動詞は、ヨハネではここでしか使われておらず、共観福音書で引用されているゼカ 13:7「羊の群れは

散らされる……」[32]（Cf. マコ 14:27、καὶ τὰ πρόβατα διασκορπισθήσονται; マタ 26:31、καὶ διασκορπισθήσονται τὰ πρόβατα τῆς ποίμνης）と関連づけて読まれうる。

他方、信従者たちがイエスのもとに「ひとつ」に集められるというモティーフは、ヨハ 10 章（10:16）[33] や 17 章（17:21, 22, 23）にも共通に見られる[34]。ヨハ 10 章では、「神の家族」を象る羊の群れが一人の羊飼いによってひとつに集められている様が描写されている。羊のために自らの命を捨てる「善き羊飼い」としてのイエスは（10:11, 15, 18）、ヘブライ語聖書に伝統的に見られる、群れを牧する「羊飼いとしての神」のイメージと通じるものである（Cf. 詩 23:1-4; 28:9; 74: 1-2; 77:20; 78:52; 79:13; 80:1; 100:3; イザ 40:11; エレ 31:10; エゼ 34:11-17; ミカ 7:14; ゼカ 9:16; 10:3 他）。同時に、ヨハ 10:16 に見られる、自分の命を捨てて（10:15, 17, 18）群れをひとつに集める「善き羊飼い」イエスの姿は、11:52 の自らの死をもって神の子供たちをひとつに集めるイエスの姿と照応している。続く「神殿奉献祭」（ハヌカー）でのエピソード（ヨハ 10:22-39）において、再びイエスは羊の群れの譬えを話し、その中で「わたしと父はひとつである」（ἐγὼ καὶ ὁ πατὴρ ἕν ἐσμεν, 10:30）と語る。羊の群れを「ひとつ」に集めるのは、根本的には父とイエスが「ひとつ」であるその在りように似ることなのである。ヨハ 17 章の「イエスの大祭司的祈り」においても、この点は繰り返し強調されている（「わたしたちがそうであるように、彼らもひとつであるように」17:11, 21, 22）。

イエスの死が信従者たちを「ひとつ」に集めるというイメージは、変奏され、ヨハネ福音書の他の箇所にも登場する。例えば、ヨハ 12:32 では、「そして、わたしが地から挙げられるなら、〔その時には〕すべての人をわたしの方へ引き寄せることになる」（κἀγὼ ἐὰν ὑψωθῶ ἐκ τῆς γῆς, πάντας ἑλκύσω πρὸς ἐμαυτόν）と言われているが、これは明らかに、イエスの十字架上の死が、イエスの信従者たちをひとつに集めることの別の表現となっている。また、ニュアンスが少々異なるものの、ヨハ 3:16 の「つまり神は独り子を与えるほど、世を愛したのである。彼を信じる人が滅びることなく、一人残らず

永遠の生命を持つためである」（Οὕτως γὰρ ἠγάπησεν ὁ θεὸς τὸν κόσμον, ὥστε τὸν υἱὸν τὸν μονογενῆ ἔδωκεν, ἵνα πᾶς ὁ πιστεύων εἰς αὐτὸν μὴ ἀπόληται ἀλλ᾽ ἔχῃ ζωὴν αἰώνιον）もまた、すべての信従者が同じ生命に与るイメージを表している。

その年の大祭司であったカイアファは（11:49; 18:14）、民族のためのイエスの死を預言する（11:50）。イエスの死は、「罪」を取り除くためのヨハネ的「贖罪死」（expiatory death）であると同時に（1:29, 36）、人々のための「代理死」（vicarious death）（11:50）でもある[35)]。ここでは、イエスの死が「散らされた神の子供たち」を「ひとつに集める」ための死であると、イエスの死の目的が明確に宣言されている。ナレーターはこれを「民族のためだけでなく、『散らされた神の子供たち』をひとつに集めるためにも死ぬ」（11:52）と敷衍しており、「神の子供たち」という言葉によって、ここでも、イエスの死を通じて神の家族がひとつに集められる様が示されていると言えよう。

II-6.　ヨハ 13:2-10「父の家」への歓待（迎え入れ）

2 さて食事がなされていた間に……、3 父がすべてを自分の手にゆだねたこと、また自分が神から出て来て、その神のもとへ往こうとしていることがわかって、4 食事〔の席〕から立ち上がり、上着を脱ぐ。そして手拭いを取って、腰に巻きつけた。5 それから、たらいに水を入れる。そして、弟子たちの足を洗っては、巻きつけた手拭いで拭き始められた。

2 καὶ δείπνου γινομένου,… 3 εἰδὼς ὅτι πάντα ἔδωκεν αὐτῷ ὁ πατὴρ εἰς τὰς χεῖρας καὶ ὅτι ἀπὸ θεοῦ ἐξῆλθεν καὶ πρὸς τὸν θεὸν ὑπάγει, 4 ἐγείρεται ἐκ τοῦ δείπνου καὶ τίθησιν τὰ ἱμάτια καὶ λαβὼν λέντιον διέζωσεν ἑαυτόν· 5 εἶτα βάλλει ὕδωρ εἰς τὸν νιπτῆρα καὶ ἤρξατο νίπτειν τοὺς πόδας τῶν μαθητῶν καὶ

ἐκμάσσειν τῷ λεντίῳ ᾧ ἦν διεζωσμένος.

イエスは告別説教の冒頭において弟子たちの足を洗う。告別説教の最初に位置する「洗足」のエピソードの主要な意味は下記の通りである[36)]。

（1）イエスの犠牲的な死の象りとしての洗足（受難の先取り）[37)]：イエスの死による救いの業に与るためには、イエスからの洗足を受けなければならない。それは、イエスの受難と死を受け入れることに他ならない。「わたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと関わり（μέρος）を持たないことになる」（13:8）は、「関わり」と訳される μέρος が、神の国で嗣業を継ぐという意味で使用されることを考慮すると（黙 20:6; 21:8; 22:19、Cf. ルカ 15:12）[38)]、まさに洗足がイエスと共に永遠の生命を持つために必要であることを示している[39)]。

（2）師が弟子たちの足を洗うという謙虚な奉仕：「主であり師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたも（καὶ ὑμεῖς）互いの足を洗い合わなければならない」（13:14）[40)] は、13:34 や 15:12 で「愛の掟」として知られている箇所と呼応し、弟子たちも師であるイエスと同じことを行うことが命じられている。イエスの行為は、弟子たちにとっての「模範」（ὑπόδειγμα, v.15）として提示されている。「模範」として示されたことは、足を洗い合う行為も、愛し合う行為も、単に謙虚に奉仕し合うということに留まらず、最終的には自らの命を差し出すという犠牲的行為をも意味する（15:13）。その意味では、(1) と意味的には重なる。

（3）彼自身のものたち（οἱ ἴδιοι）に対する深い愛の表現[41)]：それぞれの意味は相互に関連しており、19 章の十字架上でのイエスの死は、「愛する者たち」に対するイエスの（そして父である神の）究極的な愛の表現に他ならない（Cf. 13:1ff）。

（4）「罪」からの清め[42)]：洗足そのものは足の汚れを取るものであるが、洗足に象られたイエスの死は人々の罪を清める。「既に沐浴した者（ὁ λελουμένος）[43)] は、足の他には洗う必要がなく、全身が清い」（13:10）[44)] は、

表面的には祭りの前にエルサレムに入る前に巡礼者が全身浴する（λούω）ことを指しており、体の部分を洗うことを意味する νίπτω とは異なる動詞が使用されている。しかし、神学的には、イエスの言葉によって既に清められている（ヨハ 15:3）弟子たちが、さらに深い受難の神秘において更なる清めを受けることを意味していると考えられる。続いてイエスは「あなたがたは清いが、全員が清いわけではない」（13:10）[45] とイスカリオテのユダは罪からは清められていないことも示唆する。また、十字架に架けられたままのイエスは、「ユダヤ人」にとっては「穢れ」のもとと映ったが（19:31）、実際には世の罪を取り除くための清めのもとであった。

（5）祭儀的清め・聖別：神殿モティーフとの関連で考えると、イエスの洗足から祭儀的意味合いでの清めを読み取ることも可能であろう（Cf. 出エ 30:17-21; 40:30-32; ヨセフス *Jewish Antiquities*, 8.87; フィロン *Quest. in Exod.*, 1.2; *Vit. Mos.*, 2.138）。手足を洗う行為は、ユダヤ教の祭司たちが聖所に入る際に身を清める行為に対応する。ここでは、弟子たちがイエスの死を通して受ける救い、そしてその後に引き継いでいく「使命」に対する「聖化」（聖別）としての象りの意味も含まれていると考えられる。

さて、（5）と関連しているが、「家族」メタファーという観点から解釈すれば、イエスによる弟子たちの洗足は、神の子供たちを「父の家」に迎え入れるという象徴的な行為としても理解できるのではないだろうか[46]。古代において洗足は客を家に迎え入れる際の「もてなし」の意味を持っていたことはよく知られている（Cf. 創 18:4; 19:2; 24:32; 43:24; I サム 25:41; ヨセフとアセネテ 20:2; ルカ 7:44）。ギリシア古典文学『オデュッセイア』においても、英雄オデュッセウスが人知れず客人として帰宅した際に乳母のエウリュクレイアは彼の足を洗う（*Odys*.19.308-319）。聖書においても、ギリシア古典文学においても、共通して洗足は「歓待・歓迎（迎え入れ）welcoming home; hospitality」の意味を持つ。

ところで、ヨハネ福音書においては、告別説教そのもの（13-17 章）が、特殊なテクスト空間を創りだしている[47]。そこにおいては、イエスの視点は、

物語レベルでの登場人物であることを超えて、物語すべてが終わった時点の復活のキリストとして弟子たちに語る[48)]。この復活のキリストが語るとき、神（父）・イエス（子）・信従者たち（神の子供たち）が永続的に「共にいる」在りようそのものが表現される（Cf. ヨハ 15）。つまり、告別説教でイエスが語る言葉は、そのまま「父の家」の現実を物語り、ナラティヴの中では特殊なテクスト空間を構成するのである。そして、この告別説教というテクスト空間の冒頭に、イエスが弟子たちの足を洗うという行為が置かれていることで、「父の家」にその子供たち（信従者）を迎え入れるという象徴的行為が表されていると考えることもできる。同時に、それは聖なる「父の家」に入るための「清め」としても、あるいは、復活のキリストによって弟子たちに託される使命に対する「聖別」としても、機能しているように思われる。その場合、洗足は弟子たちを特別なもの――彼自身のものたち（οἱ ἴδιοι）――とする象徴的行為となる。もちろん、これは必ずしも洗足の第一の意味ではないとしても、多義的な解釈が可能なヨハネ福音書テクストであればこそ、このように「家族」メタファーに関連した解釈もありうると考えられるのである。

II-7.　ヨハ 14:2-3, 23「わたしの父の家にはたくさんの部屋がある」

2 わたしの父の家にはたくさんの部屋がある。そうでなかったとすれば、あなたがたのために場所を準備しに行こうとしているなどと、あなたがたに言ったりしただろうか。3 そして、行ってあなたがたのために場所を準備したら、また戻って来る。そして、あなたがたをわたしのいるところに引き取ることになる。わたしのいるところにあなたがたもいるようになるために。」

2 ἐν τῇ οἰκίᾳ τοῦ πατρός μου μοναὶ πολλαί εἰσιν· εἰ δὲ μή, εἶπον ἂν ὑμῖν ὅτι πορεύομαι ἑτοιμάσαι τόπον ὑμῖν; 3 καὶ ἐὰν πορευθῶ καὶ ἑτοιμάσω τόπον ὑμῖν, πάλιν ἔρχομαι καὶ παραλήμψομαι ὑμᾶς

πρὸς ἐμαυτόν, ἵνα ὅπου εἰμὶ ἐγὼ καὶ ὑμεῖς ἦτε.

「父の家」、「部屋」といった「家」に関連する用語は、いずれも「家族」メタファーに属すると考えられる。同じく告別説教の中で、イエスは自らの退去に先立ち、「父の家」と弟子たちの関係について語る。「わたしの父の家」（ἡ οἰκία τοῦ πατρός μοῦ）という表現は、ヨハ 2:16 にも類似表現が見られる。2:16 との違いは、14:2 が οἰκία を使用している点である。ヨハネ福音書の中では、「家」を指す語句として οἰκία と οἶκος は置換可能ではあるが（Cf. ヨハ 11:20 と 11:31 を比較）、ここでは 2:16 のように「神殿」を指す意味ではなく、「家」を指す οἰκία が用いられている。ここでイエスは、その父の家に「たくさんの部屋」（μοναὶ πολλαί）があると語る。「たくさんの部屋」に使用されている語句 μονή は、μένω と語源が同じであることに注意したい。ここで用いられている「部屋」は、ヨハネ的キーワードと深く関連しているのである。この語源的関連からすると、「部屋」という言葉は、父と子と神の子供たちの相互内在を「家」というメタファーで表現していると言えよう。つまり、「父と子と神の子供たち」が共にいる在りようを「家」のイメージで描いているのである。

興味深いことに、テクストの用語は、II-4 で扱ったヨハ 8:35 とのつながりも示唆している。ヨハ 14:2-3 と 8:35 との両方に、「留まる」μένω,（8:35[x2]）と「部屋」μονή（14:2）の同義語が、また「家には」（ἐν τῇ οἰκίᾳ）の言葉が共通して用いられている。両テクストはいずれも、「子」（息子＝イエス）が「父の家」に（永遠に）いることが前提とされ、子供たちがそこに「留まる」ことを述べている。14:2 では、「子」がこの「父の家」に「神の子供たち」のための「部屋」を準備し、迎えに来るという。そして、「神の子供たち」も「父の家」に永遠に住まう（ようになる）ことが言及されている。イエスのこの世からの退去が、父の家に「（子供たちの）部屋を準備しにいくこと」という比喩で語られる。こうして見ると、父の家にある信従者の「部屋・場所」は、既に 8:35 で見たように、共にある状況が「永続的」であるこ

とを意味し、かつこれを保証している。

また、「場所」（τόπος）という言葉にも着目したい。「場所」という言葉は、ヨハ 4:20「礼拝すべき場所」（ὁ τόπος ὅπου προσκυνεῖν δεῖ）や 11:48「この場所〔神殿〕」での使用もある[49)]。いずれも、「神殿」（礼拝する場所）に関連する意味で用いられているところが興味深い（この関連でも、「神殿モティーフ」と「家族」メタファーが重複していることがわかる）。

このような「天の住い」といった比喩表現は、ヘブライ語聖書の「天における神殿」（ミカ 1:2-3; イザ 57:15; 63:15; 66:1-2, Cf. エゼ 37:40ff）、あるいは、第二神殿時代のユダヤ文学に見られる「天の住処（住み家）」と比較可能であると思われる。I エノク書 14:10-13, 16-18 では、「義人たちの天の住処」として「大きな建物」や「より大きい別の家」という記述がある[50)]。また、同じエノク書では、「義人たちの住処と聖人たちの安住の地」（39:4）、「場所」（39:6）、「住処」（39:7, 8）といった表現も見られる[51)]。終末における天地・人間の変容や、メシアと共に永遠に生きる在りようを描くものとして、「霊魂の主は彼らの統率者として住まい、彼らはこの人の子と共に住み、食事や寝起きを永遠に共にするであろう」（I エノ 62:14）という記述もある。さらに、『夢幻の書』[52)] では、義人たちが「羊たち」として登場し、ヨハネの 10 章にあるイメージにとても近い（Cf. I エノ 90:28ff、「新しい家」（90:29）、「羊たちの主は、かれらがすべて良く、自分の家に戻ってきたことを非常によろこばれた」（90:32）、「わたしはその家が大きくて、広々としており、（ありとあらゆるものに）満ちているのを見た」（90:36）など）[53)]。これらのテクストから、第二神殿時代のユダヤ文学において、メシアと共に「永遠の生命（に生きる）」ことは、「家（住処、住み家）」のメタファーで表現されていることがわかる。メシアと共に「永遠に生きる」ことを「家」のメタファーで表現しているのである。このヨハネ福音書に見られる「家」のメタファーは、終末後の神と人との在りようを同じく「家」のメタファーで表すユダヤ文学の流れを引き継いでいるのではないか。

同時に、ヨハネ福音書の場合、必ずしもこの「家」を「天」に想定してい

るのではないことも、ヨハ 14:23 から見てとれる[54]。その「家」が、天にも（ヨハ 14:2-3）地にも（14:23）あると、表現が混在していることも、他のユダヤ文学と共通している（Cf. I エノ 39:1; 45:5）[55]。

同じ場所（空間）を共有するというイメージは、ヨハネ福音書の中で繰り返し登場する（Cf.「わたしのいるところにあなたがたもいる」14:3b）。これと同じような表現は次の二つの箇所にも見られる。

（1）ヨハ 12:26,「誰かがわたしに仕えたければ、わたしに従え。わたしのいるところ、そこにこそわたしに仕える者もいることになる。誰かがわたしに仕えるならば、父はその人を尊重するだろう。」[56]

この箇所では、イエスと弟子たち（信従者）が機能的に同じ働きをすることで「共にいる」ということが表明されている。「共にいる」ことは、共通の使命を果たす行為そのものによって証明される。イエスが父によって使命を託されて派遣されたように、弟子たちもまたイエスによって使命を託されている（Cf. ヨハ 20:21）。弟子たちも同じ「父の家」の家族の仕事（family business）に携わるのである。場所の共有（共にいる）は、この機能的な働きの共通性も表していると言えよう。

（2）ヨハ 17:24,「父よ、わたしに与えてくださっている人々が、わたしにいるところに、あの人々もわたしと共にいるようにしてください。あなたが世の礎を置かれる前にわたしを愛し、そのゆえにわたしに与えてくださっている、このわたしの栄光をかれらが見るために。」[57]

他方、告別説教の最後でイエスは、父がイエスに与えた人々と共にいることを祈る。共にいることと「栄光」の関連は、I エノク書などでも見られる（Cf. I エノ 62:16; 58:2; 63:3; II バル 51:3, 10-12）[58]。

上記の他にも、「わたしの往くところに、あなたがたは来ることができな

い」という表現も同様に、「共にいる」在りようを示している。敵対者に対してこの言葉が語られる場面では、イエスのいるところ（往くところ）に敵対者たちが「来ることができない」（7:34; 8:21, 22）と断じる一方で、弟子たちに対してイエスがこの言葉を発する時には、弟子たちは一時的に「来ることができない」（13:33, 36）が、彼らは「後で来ることができる」（13:33）と言い加える。ヨハ 13:33 で、ユダヤ人に対して同じことを述べつつも、イエスは弟子たちには「子たちよ」（13:33, τεκνία）と呼びかけており、さらに、14:18 では「あなたがたをみなし児のままにしておかない」[59] と約束していることに注目したい。この表現も、「家族」メタファーの一部を構成する要素となっているのである。

「家」のメタファーは父と子と神の子共たちが相互内在的な関係であることを表している。終末後の世界において「永遠の生命」を持つことと、この「家」にいる（住む）こと（あるいは、そこに「場所」を持つこと）が同じ意味を持つのは、同時代のユダヤ文学においても同様である。終末が既に「今、ここで」実現していることを説くヨハネ福音書において（現在終末論）、「家」のメタファーは、イエスのうちに「共にある」こと、すなわち「同じ生命に与る」という救いの現実が実現していることを表すばかりではなく、同じ「父」からの使命（任務、仕事）を行うことをも意味している。

II-8.　ヨハ 19:26-27 十字架の下における「愛弟子」と「イエスの母」

26 イエスは母と、自分の愛していた弟子がそばに立っているのを見ると、母に言う「婦人よ、ご覧なさい、〔これが〕あなたの子です。」27 それから、その弟子に言う、「ご覧なさい、〔これが〕あなたの母です。」その時から、その弟子は彼女を自分のところに引き受けた。

26 Ἰησοῦς οὖν ἰδὼν τὴν μητέρα καὶ τὸν μαθητὴν παρεστῶτα ὃν ἠγάπα, λέγει τῇ μητρί· γύναι, ἴδε ὁ υἱός σου. 27 εἶτα λέγει τῷ μαθητῇ· ἴδε ἡ μήτηρ σου. καὶ ἀπ᾽ ἐκείνης τῆς ὥρας ἔλαβεν ὁ

μαθητὴς αὐτὴν εἰς τὰ ἴδια.

十字架にかけられたイエスの下に、イエスの母と共に「愛弟子」（イエスの愛した弟子）が登場する（19:26）。ヨハネ福音書において愛弟子は、イエスの十二弟子の中で唯一最後までイエスに従い、その受難と死の証人となった「理想的弟子」[60] であり、イエスの母は「信従者のモデル」[61] である。イエスの母と弟子（愛弟子）が登場する別の場面（2 章の「カナの婚礼」）[62] と、この十字架の場面が対応しているのは明らかである[63]。登場人物が同じであるばかりではなく、「女性」（γύναι）などの語句のレベルにおいても共通性が見られる（2:4//19:26）。また、2 章において「わたしの時（ἡ ὥρα μου）はまだ来ていない」（2:4b）と言ったイエスの言葉に対して、この 19 章ではその「時」が到来し、イエスは父から託された使命を完成する（19:30）。さらに、カナの婚礼での出来事はイエスの「最初のしるし」（2:11）であり、十字架上の死は「最後のしるし」である。2 章の婚礼という人生の節目となる祝い・喜びの出来事に対して、19 章では死（刑死）という人生の終焉・悲哀の出来事という点においても対比されている。

ところで、この両場面をつなぐと考えられるヨハ 16:21-24 は、同じ語句（「女性」、「時」）が使用されている箇所である。「彼女の時」（16:21, ἡ ὥρα αὐτῆς）が来た女性が、出産する苦しみを通して、子供（τὸ παιδίον）が生まれ出た喜びに至るイメージ（譬え）が語られている。「家族」メタファーの観点からすると、イエスの受難を女性の出産に譬えているところは、極めて興味深い用例と言える。子供の「出産」のイメージが「一人の人間が世に生まれた喜び」（τὴν χαρὰν ὅτι ἐγεννήθη ἄνθρωπος εις τὸν κόσμον）として、両者の場面をつないでいる。

さて、ヨハ 19:26 では、「愛弟子」がイエスの母の「息子（あなたの息子）」（ὁ υἱός σου）として規定され託される。（イエス以外の者に「息子」という言葉が適用されるのはこの箇所のみ。）同時に、イエスは愛弟子に対しても、イエスの母を「あなたの母」（ἡ μήτηρ σου）として規定し託される。こうし

て、十字架上のイエスは、愛弟子と自分の母相互に「親子関係」を成立させる。この世における使命を完遂せんとするイエスの言葉によって、弟子の理想像である愛弟子がイエスの母と親子関係に組み込まれることで、「神の家族」の誕生が宣言さていると考えられる。

イエスの十字架上の死をもって、「神の家族」がこうして誕生・完成する。イエスの母も、愛弟子に象徴される信従者も、それまでの通常の家族関係とは異なる「神の家族」の一員として再構築される。それは、「神（上）から生まれた者」（ヨハ 1:13; 3:3）たちの「家族」――「神の家族」――である。イエスの死によって神の愛が具現され、信仰のモデルとされるイエスの母と、弟子（信従者）のモデルとされる愛弟子が共にいること、そして親子関係となることにより、父の家における「神の家族」がここに誕生する。これにより、イエスの使命が完成したことが示唆されているのである。十字架上のイエスの言葉（相互委託による親子関係の成立）は実際、イエスがこの世で成し遂げた最後の使命でもあった（この直後にイエスは死ぬ Cf. 19:28）。

II-9. ヨハ 20:17「わたしの父のところ、あなたがたの父のところ、わたしの神のところに、あなたがたの神のところに」

> 17 イエスが彼女に言う、……「わたしの兄弟たちのところへ行きなさい。そして彼らに言いなさい、『わたしは、自分の父のところ、あなたがたの父のところに、わたしの神のところに、あなたがたの神のところに、上って行く』と。」
>
> 17 πορεύου δὲ πρὸς τοὺς ἀδελφούς μου καὶ εἰπὲ αὐτοῖς· ἀναβαίνω πρὸς τὸν πατέρα μου καὶ πατέρα ὑμῶν καὶ θεόν μου καὶ θεὸν ὑμῶν.

復活顕現物語において、復活のキリストがマグダラのマリアに対して、「わたしの兄弟たちのところに行って伝えよ」（20:17）と命じた箇所である。こ

こで、復活のイエスは、イエスの父が弟子たち（信従者）の父であり、イエスの神が弟子たち（信従者）の神であると同定する。もっとも、テクストの力点は、父の元に還る（「わたしは上って行く」）というメッセージにあるのだが、「家族」メタファーの観点から捉えると、父が既にイエスと信従者の共通の「父」であり「神」とされていることは非常に重要であろう。II-8 で見た通り、イエスの十字架上の死をもって「神の家族」の誕生が完成された後で、復活のキリストがマグダラのマリアに対してこのように語ることで、弟子たちが神の子供として「神の家族」の一員になったことを強調していると思われる。弟子たちがイエスの「兄弟たち」と呼ばれるのはそのためである[64)]。マグダラのマリアに託された「神の家族」の完成が復活のメッセージの意味内容とされていることを過小評価するべきではない。福音書のナラティヴを通して、「神」（1:2）は、イエスと信従者の「父」（20:17）となり、「神」は「神の子供たち」の「父」となる。換言すれば、イエスの信従者は、同じ「父の家」の家族の「子供たち」とされ、イエスを通じて、同じ父である神の家族の「兄弟たち」となるのである。

なお、以上の各「家族」メタファーの内テクスト構成を図にすると次のようになる（次頁、図 2 参照）。

III.　まとめと結論

III-1.「家族メタファー」のまとめ

ヨハネ福音書では、序文において既に神とイエスが父子関係であると表明され、ヨハ 1:12-13 でイエスの信従者たちが、この「神の家族」（*Familia Dei*）における「神の子供たち」となることが宣言される。福音書前半部では、神（父）と神の子供たちへの言及箇所は決して多くはないが、イエス自身は神を「わたしの父／父」であるとしている（2:16 // Cf. 1:14, 18「独り子」と「父」の関係）。この父子関係に基づく派遣思想がイエスの言葉のうちに継続的に表現される。神とイエスとのこの父子関係を下敷きとして、イエスの信従者

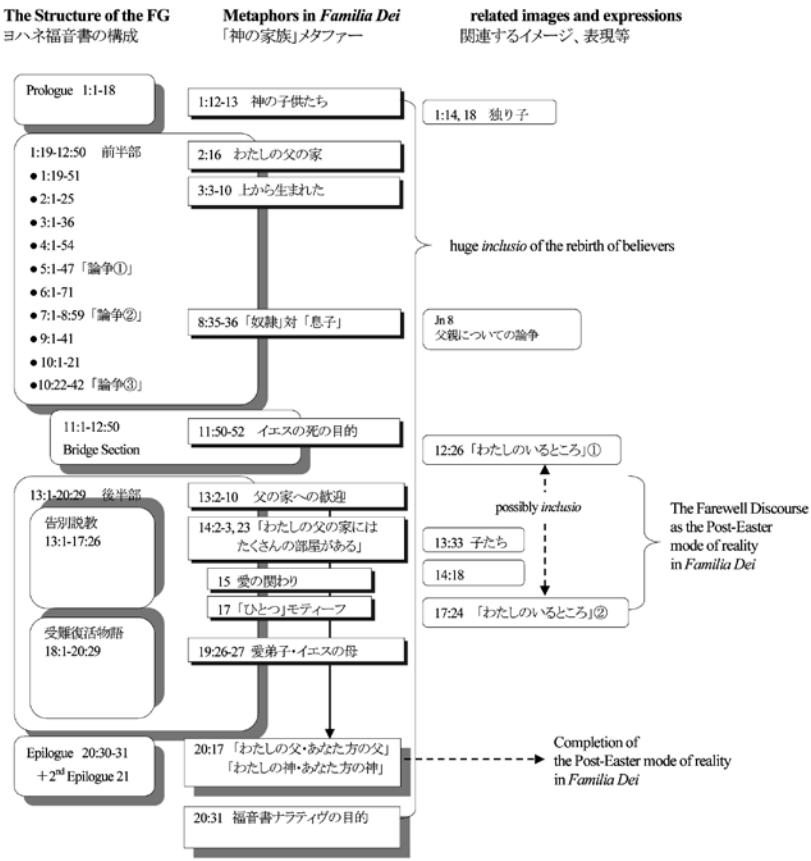

図２　ヨハネ福音書における「神の家族」メタファーの内テクスト構成

たちも「上から生まれ」（3:3-10）た者として、この家族関係の中に組み込まれ、「（永遠に）住まう（留まる）」者たち（8:35-36）となる。福音書転換部（Bridge Section）65）にあたる 11:1-12:50 の中では再度、「散らされた神の子供たちを集めるためのイエスの死」（11:50-52）が言及される。

イエスと神（父）との機能的側面の関係性も、そのまま父子からイエス・信従者に適用される。（父と同じ「業」を行う。Cf. 8:39, 41）。こうして、父

＝家父長（*pater familias*）として、父・子・神の子供たちは、同じ「家族の仕事」（family business）にも携わることになる。（この点は、12:26 でも表現されている。「イエスと共にいる」ことが「同じ使命に与る」ことを意味する。）また、父と子と神の子供たちの「愛の相互内在」・「本来あるべき場に属する在りよう」が動詞「留まる」（μένω）の使用によって提示されている（Cf. 8:35-36、また告別説教 14-15）。

告別説教に始まる福音書後半部においては、「父の家」の在りようが示される。ヨハ 13:2-10 では、イエスが弟子たちに洗足をすることによって、神の子供たちに対する「父の家」への歓迎が象徴的に表される。14:2-3, 23 は、8:35-36 とも関連し、「神の子供たち」が父の家に永続的に住まうことが示される。第二神殿時代のユダヤ文学との比較によって、「家」（父の家）のメタファーは、「永遠の生命」に与ることと同じ意味、すなわち、終末時における「神と人との共生」を表していることがわかる。

19:26-27 では、十字架の下で愛弟子とイエスの母がイエスによって親子関係とされる。これは、イエスの「時」の到来時に、ヨハネ的信仰者のモデルである「イエスの母」と、理想的な弟子である「愛弟子」との親子関係が成立する象徴的な出来事であり、イエスの死をもって「神の家族」が完成することを意味する（Cf. 11:50-52）。

20:17 の復活顕現物語では、復活のキリストがマグダラのマリアに託したメッセージの中で、イエスの神（父）が信従者たちの神（父）と同定されている。こうして、イエスの信従者たちは、同じ「父の家」の家族の「子供たち」であることが宣言され、イエスを通じて、信従者たちが同じ父である神の「兄弟たち」（20:17）となる。

ヨハネ福音書の多種多様なメタファーの中でも、「家族」メタファーは極めて包括的で根本的なイメージ群のもととなっている。「家族」、「家」というイメージを介して、「生命」（永遠の生命、誕生、再生）、「愛」を分かち合い共有するといったもっとも重要な在りようと関係性が表現される。また同時に、この「家族」の在りようとして、機能的な側面についても、似たものと

なること（family resemblance）が特徴的である。

「父の家」（家族）メタファーの内テクスト構成については、図 2 を参照。

III-2. 「神殿モティーフ」との関連でのまとめ

内テクスト構成に関して、神殿モティーフと家族メタファーの関係性をまとめてみたい。

キリスト論的な神殿モティーフは福音書前半部に集中し（図 3 参照）、最終的にイエスの十字架の場面において、多様な神殿モティーフが総合されていた。これに対して、家族メタファーは、神とイエスと信従者の相互関係を表現する教会（共同体）論的なメタファー群であり、神と人との最終的な在りようが表現されている。この家族メタファーは、福音書前半部では疎らであるが―従って、図 3 のように、福音書前半部では神殿モティーフが主となる―、特に告別説教の場面に集中して見られる（図 2 参照）。ただし、序文（1:12-13）・転換部（11:50-52）、イエスの磔刑場面（19:26-27）といった重要な箇所に配置され、最終的に復活の場面でイエスのメッセージとして総括されている（20:17）。告別説教が福音書の中で、特殊なテクスト空間を形成していることは既に指摘した通りであり、15 章・17 章にも表明される通り、ここでのイエスの語りは物語時間を超えて、神・イエス・信従者の在りようを描き出している。

「神殿モティーフ」が福音書前半に、「家族メタファー」が告別説教に集中する理由は、福音書前半が論敵としての「ユダヤ人」に対する反駁が中心となっているからであり、告別説教が「神の子供たち」となる弟子たちへの訓示が中心となっていることと対応すると思われる。序文でも宣言されている通り、イエスの登場は「この世」に「信じる者」と「信じない者」の分断をもたらす。福音書前半に集中的に登場するイエスの敵対者、「ユダヤ人」（もしくは「ファリサイ派の人々」）は、イスラエルとして「神の子」であるという自覚・自負を持ち、その意味では自分たちこそ「神の家族」であるという自意識が強かった。そのユダヤ人たちに対して、「悪魔である父からの者」

（8:44）とまでイエスが断罪する前半では、明らかに論敵（敵対者）としての「ユダヤ人」が念頭にある。ヨハネ福音書は、羊のために命を捨てる「良い羊飼い」であるイエス（10 章）のもとに集められ、形成される真のイスラエル（15 章）を提示する。また、神殿モティーフが前半に集中するもう一つの理由は、「神の子」を自負するユダヤ人にとって、地上におけるその象徴である「エルサレム神殿」に対して、「復活のイエスの体」に象られ、既に実現している現在終末論的な救いの現実としての「父の家」が対峙されているとも考えられる。そこでは、イエスの信従者こそが真の「神の子供たち」であるという主張がなされているのである。ヨハネ福音書が書かれた時代には既にエルサレム神殿が存在していなかったという事実は、この主張をより「正しい」（＝信じるに値する）ものであることを裏付けることになる。

このように、ヨハネ福音書においては、キリスト論的な「神殿モティーフ」と、神・イエス・信従者の関係を存在論的・機能的に表現する「家族」モティーフが効果的に配備され、最終的に読者をこの「神の家族」の一人として組み込むことが目指されているのである。

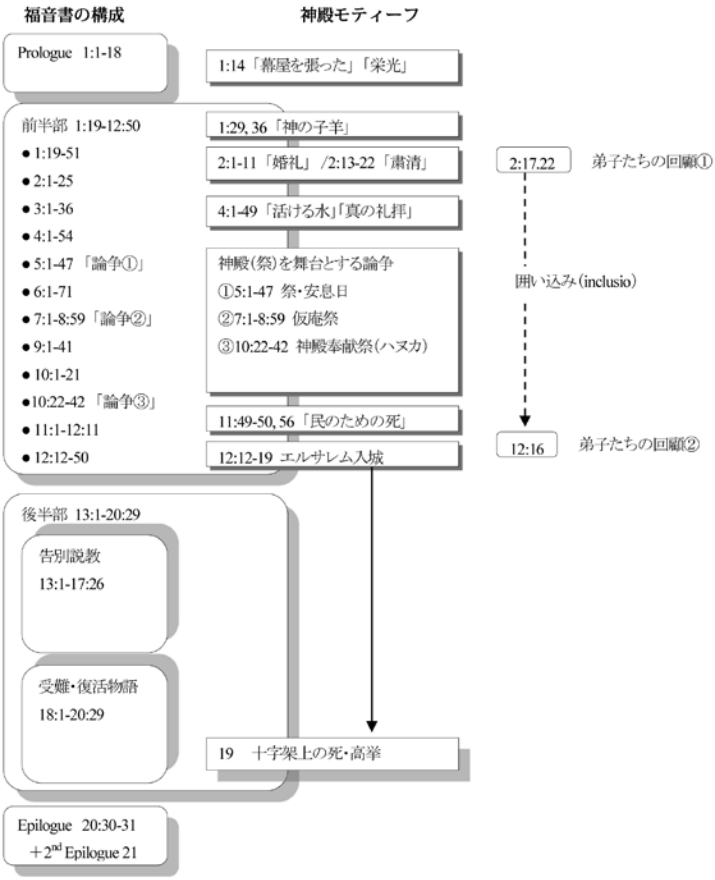

図３　ヨハネ福音書における「神殿モティーフ」の内テクスト構成

注

1） 拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」『聖書学論集』第 42 号、リトン、2010 年、193-239 頁。この論考で取り上げた箇所は、下記の通りである。ヨハ 1:14（ヨハネ序文); 1:29, 36（「神の子羊」); 2:1-11（カナの婚礼), 13-22（神殿粛清); 4:1-49（サマリアの女性との対話); 5:14//7:14, 28; 8:20, 50//10:23（イエスの敵対者との論争の場としての神殿); 11:49-50, 56（敵対者がイエス殺害を謀る場としての神殿); 12:12-19（エルサレム入場); 19（イエスの十字架上の死)。

2） 神殿モティーフに見られるイエスの機能として、(1) イエス＝「新しい神殿」（ヨハ 1:14; 2:1-11; 4:1-49; 7:37-39; 10:34-36; 12:12-19)、(2)「献げられる子羊（犠牲）」（ヨハ 1:29, 36; 2:13-22; 11:49-50, 56; 19:14)、(3)「新しい祭壇」（ヨハ 10:22-39）を抽出した。

3） 拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、226 頁。

4） ヨハネ福音書における「家族」メタファー（もしくはモティーフ）を考察している研究として次のものがある。Jan G. van der Watt, *Family of the King: Dynamics of Metaphor in the Gospel according to John* (Leiden: Brill, 2000); Mary L. Coloe, *Dwelling in the Household of God: Johannine Ecclesioloy and Spirituality* (Collegeville, Minnesota: A Michael Glazier Book/ Liturgical Press, 2007). いずれも、家族メタファーを取り上げる箇所はそれぞれ異なるが、「教会論的なメタファー」としている点では一致している。van der Watt は、これらを「家族イメージ」(“the family imagery”) と呼び、Symbol, Metaphor の理論的な定義から入り（Chapter I)、中心的となる主要箇所（ヨハ 15, 17）と関連箇所（1:1, 14, 29, 36; 1:32; 1:51; 2:19-22; 3:8, 14; 12:24; 16:21-22）の説明を行っている。関連箇所としては、論者が神殿モティーフとして取り上げたものも含まれている。The family imagery がより根本的で包括的である点では同意するが、その他のモティーフをすべてこのメタファーの下に従属的に含めることに対して論者は異論がある。後半は、Birth, Life, Bread and Water (Food), Light, Education といった「家族」に関連するテーマごとにメタファーを解説している。

Mary L. Coloe も、その著書 *Dwelling in the Household of God: Johannine Ecclesiology and Spirituality* (Collegeville, Minnesota: A Michael Glazier Book/ Liturgical Press, 2007) において、家族メタファーを取り上げている。彼女は「神殿モティーフ」に関して、*God Dwells with Us: Temple Symbolism in the Fourth Gospel* (2001) を著しているが、その後、神殿モティーフの研究から「家族」メタファーの研究へと移行している。しかしながら、取り上げている箇所は van der Watt や論者とはまったく異なる（「父の家」2:16; 8:35-36; 14:2-3 は共通するが)。彼女の場合、家族メ

タファーを教会論的なモティーフとして説明し、洗礼者ヨハネもイエスの「友」として家族の一員とされる。基本的には、弟子たち（信従者たち）がイエスの元に集められる在りようを「神の家族」の形成として見る点では、論者と同じであるが、扱っている箇所に関しては多くの違いがある。

その他、テーマ的に関連すると思われる先行研究は以下の通りである。James McCaffrey, *The House with Many Rooms: The Temple Theme of Jn 14, 2-3,* Analecta Biblica 114 (Rome: Editrice Pontificio Instituto Biblico, 1988); Sjef van Tilborg, *Imaginative Love in John* (Leiden/ New York: Brill, 1993); Joan Cecelia Campbell, *Kinship Relations in the Gospel of John*, CBQMS 42 (Washington, D.C.: The Catholic Biblical Association of America, 2007); Martin M. Culy, *Echoes of Friendship in the Gospel of John* (Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2010). McCaffrey は、ヨハ 14:2-3, 23 を扱っている。管見によれば、この箇所を取り上げている研究はいずれも古く、McCaffrey（1988）を除き、ほとんどが 1960 年代のものである。van Tilborg は、直接的に本論考のテーマとは関連しないのだが、「愛」という主題の中に「家族愛」（family love）を取り上げ、その中で 2:1-12（カナの婚礼）、19:25-27（十字架の下での母と愛弟子）、3:5（上から生まれる）、1:13（神の子どもたちとなる）を説明している。さらに、Campbell は、「イエスの母」・「イエスの兄弟」・「愛弟子」に焦点を当てている。古代ユダヤ世界での「家族」の在りようを歴史的に考察しつつ、文芸批評的にテクストを分析している点は興味深い。最後に Culy は、「友情」（friendship）をモティーフとして、ヨハネ福音書を分析している。

5） 多種多様なメタファーのネットワークがヨハネ福音書を構成していることは、既に *Anatomy of the Fourth Gospel: A Study in Literary Design* (Philadelphia: Fortress Press, 1987) において Culpepper が指摘している。カルペッパー（Culpepper）は、第 6 章（「内的解説」Implicit Commentary）で「象徴的表現」（Symbolism）を解説する。また、カルペッパー（Culpepper）は、Walter Hindere（“Theory, Conception, and Interpretation of the Symbols,” in *Perspectives in Literary Symbolism*, ed. by J. Strelka [University Park: Pennsylvania State University Press, 1968]: 83-127）の “core and guide symbol” または “coordinate and subordinate symbols” といったシンボル分類を採用しながら、シンボル間の相対的な価値と意味合いについて考察する（Culpepper, 185）。「シンボルが群生し（cluster）相互関連し合う（interrelate）」（Culpepper, 185）ことを前提とし、読者はより深いテクスト理解のために、これらのメタファーのネットワークを読み解くことが求められるとする。実際、ヨハネ福音書の作者（内的作者）は、多数のメタファーのネットワークを用いて、そのメッセージを内的読者に伝えようとしている。van der Watt はこの点を次のように説明する（van der Watt, *Family of the King: Dynamics of Metaphor in the Gospel according to John*, 397）。

This Gospel communicates its message by means of refined use of imagery, which mainly consists of metaphors which are inter-related to form a network. The individual metaphors are linked on both syntactic and semantic (thematic) levels, which results in cohesion. If these metaphors belong to the same semantic field, functioningas small building bricks of a larger imagery, they should be read as part of the network of metaphors.

6） アッティカ方言のギリシア語（Attica Greek）では、ὁ οἶκος は「財産」、ἡ οἰκία は「住居」という区別があったが、新約文書ではいずれも「家・家族」。「神殿」の意味で用いられるのは、LXX では ὁ οἶκος のみ。

7） Cf. τέκνον（マコ 2:5; 10:24; ルカ 15:31; 16:25, Cf. ヘブ 2:13); τέκνα（信従者を意味する）（ガラ 4:19）.

8） Cf. I ヨハ 2:1, 12, 28; 3:7, 8; 4:4; 5:21.

9） Cf. I ヨハ 2:14, 18.

10）Cf. ヨハネ文書ではこの用法が見られる（Cf. 1 ヨハ 4:9)。「独り息子」「独り娘」などの使用例としては、ルカ 7:12; 8:42; 9:38; ヘブ 11:17.

11）ヨハネ福音書の日本語訳は、基本的に岩波訳に沿いつつ、筆者が一部変更した。Cf. 小林稔訳「ヨハネによる福音書」、『新約聖書』新約聖書翻訳委員会、岩波書店、2004 年。

12）広く認められているように、ヨハネ福音書の構成は、序文（ヨハ 1:1-18)、前半部（1:19-12:50)、後半部（13:1-20:29)、第一終結部（20:30-31)、第二終結部（21:1-25）である。Cf. Raymond E. Brown, *The Gospel according to John*, 2 vols., AB 29-29a (Garden City, New York : Doubleday, 1960): I cxxxviii-cxli; Rudolf Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, Trans. by Kevin Smyth, 3vols. (New York: The Seabury Press, 1980). ただし、特にこの区分を取り上げて説明しているのではなく、福音書の解説をこの区分に従って行っている（Brown も同様): (1) Jn 1:1-12:50, (2) 13:1-20:31, and (3) 21; Barnabas Linders, *The Gospel of John*, NCB. (London: Oliphants, 1972):70-73; D. Moody Smith, *John*, Abingdon Testament Commentaries (Nashville: Abingdon, 1999): 21-22; G.R. Beasley-Murray, *John*, WBC 36 (Nashville: Thomas Nelson, 1999): viii; Herman N. Ridderbos, *The Gospel of John: A Theological Commentary*, trans. by John Vriend (Grand Rapids, Michigan/ Cambridge, U.K.: William B. Eerdmans Publishing Company, 1997): v-xi; Francis J. Moloney, *John*, Sacra Pagina 4 (Collegeville, Minnesota: The Liturgical Press, 1998): 23-24; Craig S. Keener, *The Gospel of John: A Commentary*, 2 vols. (Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, Ins., 2003): I xi-xxiv; Jean Zumstein, *L'Évangile selon Saint Jean (13-21)* (Genève: Labor et Fides, 2007): 321-

323.

13）「名」（τὸ ὄνομα）：ヨハ 1: 6, 12; 2:23; 3:18; 5:43(x2); 10:25; 12:28; 14:13, 14, 26; 15:16, 21; 16:23, 24, 26; 17:6, 11, 12, 26; 20:31.

14）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」で「わたしの父の家」（2：16）は神殿モティーフとして取り上げたので、ここでは「神の家族」との関連でのみ説明したい。

15）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、201-204 頁。

16）イザ 56:7「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」また福音書で、この表現に最も近いのは、ルカ 2:49「わたしは自分の父の〔家〕にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」（οὐκ ἤδειτε ὅτι ἐν τοῖς τοῦ πατρός μου δεῖ εἶναί με）。この「〔家〕」は、「慣用的に『家』を示唆する言い方。但しその『家』とは 46 節の「神殿〔境内〕」と必ずしも一致はしない。」佐藤研訳「ルカによる福音書」、『新約聖書』岩波書店、2004 年、脚注解説四、195 頁。

17）Cf. Calvin Mercer, “ΑΠΟΣΤΕΛΛΕΙΝ and ΠΕΜΠΕΙΝ in John,” *NTS* 36 (1990): 619-624; Jürgen Becker, Ich bin die Auferstehung und das Leben:Eine Skizze der johanneischen Christologie,” Theologische Zeitschrift 39 (1983): 138-151; Dorothy Ann Lee, “The Symbol of Divine Fatherhood,” *Semeia* 85 (Atlanta: SBL, 1999): 180-181.

18）ἀποστέλλω（派遣する）: ヨハ 3:17, 34; 5:36, 37, 38; 6:29, 57; 7:29; 8:42; 10:36; 11:42.// πέμπω（送る）: ヨハ 4:34;5:23, 24, 30, 37; 6:38, 39, 44; 7:16, 18, 28, 33; 8:16, 18, 26, 29; 9:4; 12:44, 45, 49; 13:16, 20 [x2]; 14:24; 15:21; 16:5; 20:21.

19）Karl H. Rengstorf, “ἀποστέλλω, ἀπόστολος,” *TDNT* 1:398-447; Howard S. Friend, “Like Father, Like Son: A Discussion of the Concept of Agency in Halakah and John,” *Ashland Theological Journal* 21 (1990): 35-42.

20）ヨハ 10:30 で「ひとつ」という時に masculine の εἷς ではなく（その場合「(同一の）一人」という意味になる）、neutral の ἕν が使われていることに注意する必要がある。Cf. D. A. Carson, *The Gospel according to John* (Grand Rapids, Michigan; William B. Eerdmans Publishing Company, 1991): 394; Andreas J. Köstenberger, *John* (Grand Rapids, Michigan: Baker Academic Press, 2004): 312-313.

21）2 章が福音書のプログラミックなテーマを提示していることは、次を参照のこと。拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、204 頁。

22）新共同訳（ニコデモが誤解した意味）。

23）「生命の水」（τὸ ὕδωρ τὸ ζῶν）：ヨハ 4:10, 11, 14, 15; 7:38。

24）「霊」（πνεύμα）：ヨハ 1:32, 33(x2); 3:5, 6 (x2), 8 (x2), 34; 4:23, 24 (x2); 6:63 (x2); 7:39 (x2); 11:33; 13:21; 14:17, 26; 15:26; 16:13; 19:30; 20:22。

25）「神殿モティーフ」の関連においては、「水」や「霊」はエゼ 47 章やゼカ 14 章を

背景としていることを見た。拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、206-208、211-212 頁。

26）Jörg Frey, “Eschatology in the Johannine Circle,” in *Theology and Christology in the Fourth Gospel*, ed. by G. van Belle, J.G. van der Watt, and P. Maritz (Leuven: Leuven University Press, 2005): 72-73.

27）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、210-212 頁。特に注 53-55 も参照のこと。

28）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、229-230 頁、注 11 参照。

29）神殿モティーフの論考において、カイアファの預言についても考察したので、それについては次を参照のこと。拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、214-217 頁。

30）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、214-217 頁。

31）上村静『キリスト教信仰の成立—ユダヤ教からの分離とその諸問題』fad 叢書 No.4、fad 叢書編集委員会、2005 年、160 頁。

32）ゼカ 13:7 の LXX は別の動詞を使用。（καὶ ἐκσπάσατε τὰ πρόβατα [LXX]）。

33）Cf. ヨハ 10:16,「わたしには、この中庭に属さない羊たちもいる。わたしはそれら〔の羊〕も導かなければならない。彼らもわたしの声を聞くようになり、〔いつか〕ひとつの群れ、一人の牧者となるであろう。」καὶ ἄλλα πρόβατα ἔχω ἃ οὐκ ἔστιν ἐκ τῆς αὐλῆς ταύτης· κἀκεῖνα δεῖ με ἀγαγεῖν καὶ τῆς φωνῆς μου ἀκούσουσιν, καὶ γενήσονται μία ποίμνη, εἷς ποιμήν.

34）「ひとつ」モティーフ（“Oneness Motif”）。Cf. Mark L. Appold, *The Oneness Motif in the Fourth Gospel: Motif Analysis and Exegetical Probe into the Theology of John*, WUNT1 (Tübingen: Morh Siebeck, 1976).

35）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、216 頁。

36）C. K. Barrett, *The Gospel according to St. John*, second edition (London: SPCK, 1978): 440ff; Brown, *The Gospel according to John*, II 566ff; Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, III 21ff; Smith, John, 252; G. Richter, *Die Fußwaschung im Johannesevangelium. Geschichte ihrer Deutung*, Biblische Untersuchungen, 1 (Regensburg: F. Pustet, 1967); Etan Levine, “On Symbolism of the pedilavium,” *American Benedictine Review* 33 (1982): 21-29; F. Segovia, “John 13:1-20: The Footwashing in the Johannine Tradition,” *ZNW* 73 (1982): 32ff; John C. Thomas, *Footwashing in John 13 and the Johannine Community* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991); Craig R. Koester, *Symbolism in the Fourth Gospel: Meaning, Mystery, Community* (Minneapolis: Fortress Press, 2003): 130-134.

37）Brown, *The Gospel according to John*, II 566; Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, III 19; Moloney, *Gospel of John*, 373-376; Richter, *Die Fußwaschung*

im Johannesevangelium, 287-300; Levine, "On Symbolism of the pedilavium," 25-26; Segovia, "John 13:1-20: The Footwashing in the Johannine Tradition," 35; Thomas, *Footwashing in John 13 and the Johannine Community*,16.

38）Köstenberger, *John*, 406.

39）以前はこの洗足をキリスト教の入信儀礼としての洗礼と見做す解釈が主流であった。Barrett, *The Gospel according to St. John*, 440-441; Thomas, *Footwashing in John 13 and the Johannine Community*, 13.

40）εἰ οὖν ἐγὼ ἔνιψα ὑμῶν τοὺς πόδας ὁ κύριος καὶ ὁ διδάσκαλος, καὶ ὑμεῖς ὀφείλετε ἀλλήλων νίπτειν τοὺς πόδας·

41）Koester, *Symbolism in the Fourth Gospel: Meaning, Mystery, Community*, 131-132.

42）Barrett, *The Gospel according to St. John*, 442; Brown, *The Gospel according to John*, II 566; Schnackenburg, *The Gospel according to St. John*, III 21-22; Thomas, *Footwashing in John 13 and the Johannine Community*, 14-15; Koester, *Symbolism in the Fourth Gospel: Meaning, Mystery, Community*, 132-133.

43）「沐浴する」（λούω）とは、全身浴することを指す。

44）ὁ λελουμένος οὐκ ἔχει χρείαν εἰ μὴ τοὺς πόδας νίψασθαι, ἀλλ᾽ ἔστιν καθαρὸς ὅλος·

45）καὶ ὑμεῖς καθαροί ἐστε, ἀλλ᾽ οὐχὶ πάντες.

46）A.J. Hultgren, "The Johannine Footwashing (13. 1-11) as Symbol of Eschatological Hospitability," *NTS* 28 (1982): 539-546; Keener, *The Gospel of John*, II 902.

47）Nozomi Miura, *Narratological Function of the Disciples in the Fourth Gospel—Formation of the Implied Reader through the Narrative Perspective of the Disciples—* (March, 2012)、博士論文：東京大学大学院 総合文化研究科 : 124-127; Gail O'Day, " 'I Have Overcome The World' (John 16:33): Narrative Time in John 13-17," *Semeia* 53 (1991): 157ff.

48）O'Day は前述の論考の中で、これを "intrinsic temporal paradox" と呼んでいる。以下は、彼女の説明からの引用である（p.157）。In a very real sense, the whole farewell discourse is out of place in the progression of narrative time in the Fourth Gospel. …It is not simply that certain parts of the farewell discourse disturb the temporal sequence of the narrative, but rather the discourse itself disturbs the sequence of the gospel narrative. Chaps. 13-17 do not merely contain prolepses; they are themselves proleptic in the larger Johannine narrative. These chapters bring the future and the present together in one narrative moment in ways that challenge conventional notions of time. In chaps. 13-17 the future is thus an essential element in the narrative construction of the present.

参照として、拙著、*Narratological Function of the Disciples in the Fourth Gospel—*

Formation of the Implied Reader through the Narrative Perspective of the Disciples—（2012 年東京大学大学院総合文化研究科提出、未刊行の博士論文）、124ff 頁。文芸批評的に見たナラティヴ時間におけるこの視点の融合を、かつて大貫隆は時間論的に捉え、「全時的イエス」として、過去・現在・未来の時間を統合するイエスを提示した。Cf. 大貫隆『ロゴスとソフィア　ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』教文館、2001 年、62-67、271-274 頁。Takashi Onuki, *Gemeinde und Welt im Johannesevangelium: Ein Beitrag zur Frage nach der theologischen und pragmatischen Funktiondes johanneischen "Dualismus."* Wissenschaftliche Monographien zum Alten und Neuen Testament 56 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1984): 38-54, 185-213.

49）11:48 については、神殿モティーフで取り扱った。拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、215 頁。

50）エノク書の英訳は、OTP による（E. Isaac 訳）。*The Old Testament Pseudepigrapha: Apocalyptic Literature and Testaments*, ed. by James H. Charlesworth, 2vols. (New York/ London: Doubleday, 1983). 邦訳は、村岡による。村岡崇光「エチオピア語エノク書」『聖書外典偽典 4』旧約偽典 II、教文館、2007 年（第 9 版）、164 頁。第一エノク書の構成と年代については、I Enoch 1-36『寝ずの番人の書』*The Book of Watchers*（BCE3 世紀）、37-71『たとえの書』*The Similitudes*（CE1 世紀）、72-82『天体の書』*The Book of Heavenly Luminaries*（BCE4-3 世紀）、83-90『夢幻の書』*The Book of Dream Visions*（BCE164-163 年頃）、91-108『エノクの手紙』*The Epistle of Enoch*（BCE175-167 年頃）。Cf. George W. E. Nickelsburg, *Resurrection, Immortality, and Eternal Life in Intertestamental Judaism and Early Christianity*, expanded edition (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2006); 上村静『宗教の倒錯』岩波書店、2008 年、92-93 頁。

51）39:8「そこへわたしは住みたくなった。わたしの魂はその住処にあこがれた。わたしの居どころは前からそこにあったのだ。霊魂の主のみまえにしかとそのようにわたしのことが定められていることゆえ。」（村岡、204 頁。）

52）I エノ 83-90 章。

53）他にも、偽フィロン、*Biblical Antiquities* での "an everlasting dwelling place"(3:10)、"chambers of souls" (32:13; 40:6) など。英訳は、OTP による（D. J. Harrington 訳）。また、「義人の魂が（陰府の）住み家で尋ねたこと」（IV Ezra 4:35）、「彼らはその住み家に集められるだろう」（7:101）。（邦訳は、八木による。八木誠一、八木綾子訳「第四エズラ書」『聖書外典偽 5』旧約偽典 III、教文館、2000 年（第 6 版）。）あるいは、「魂の蔵」（II Bar 21:23）や 42:7ff なども参照（邦訳は、村岡による。村岡崇光「シリア語バルク書」『聖書外典偽典 5』旧約偽典 III、教文館、2000 年（第 6 版））。さらに、死海文書における יחד「共同体」も参照のこと。Cf. IQH xi, 21ff

“an everlasting community” (v.21); “in the community of jubilation” (v.23)。

54）Cf. ヨハ 14:23,「イエスは答えて彼に言った、『わたしを愛する人がいれば、わたしの言葉を守ることになるはずである。また、父が彼を愛するようになる。そして、わたしたちは彼のところに来て、彼のもとに部屋を作るであろう。』」ἀπεκρίθη Ἰησοῦς καὶ εἶπεν αὐτῷ· ἐάν τις ἀγαπᾷ με τὸν λόγον μου τηρήσει, καὶ ὁ πατήρ μου ἀγαπήσει αὐτὸν καὶ πρὸς αὐτὸν ἐλευσόμεθα καὶ μονὴν παρς αὐτῷ ποιησόμεθα.

55）I エノ 39:1「そのときには、選ばれた聖なる子らが天から降りてきて、彼らの種は人の子らとひとつになるであろう。」; 45:5「わたしはまた乾いた大地を変えて祝福とし、そこにわたしの選民を住まわせる」など。終末後の天井の住み家のことを語る文脈で「地」（の変容）が語られる。

56）ヨハ 12:26、ἐὰν ἐμοί τις διακονῇ, ἐμοὶ ἀκολουθείτω, καὶ ὅπου εἰμὶ ἐγὼ ἐκεῖ καὶ ὁ διάκονος ὁ ἐμὸς ἔσται·

57）ヨハ 17:24、Πάτερ, ὃ δέδωκάς μοι, θέλω ἵνα ὅπου εἰμὶ ἐγὼ κἀκεῖνοι ὦσιν μετ᾽ ἐμοῦ, ἵνα θεωρῶσιν τὴν δόξαν τὴν ἐμήν, ἣν δέδωκάς μοι ὅτι ἠγάπησάς με πρὸ καταβολῆς κόσμου.

58）I エノ 62:16「きみたちの栄誉は霊魂の主の前につきることがない」。

59）ヨハ 14:18、Οὐκ ἀφήσω ὑμᾶς ὀρφανούς.

60）Raymond F. Collins, *These Things Have Been Written: Studies on the Fourth Gospel*, Louvain Theological & Pastoral Monographs 2. (Louvain: Peeters// Grand Rapids: Eerdmans, 1990); Culpepper, *Anatomy of the Fourth Gospel*, 121-123; David R. Beck, *The Discipleship Paradigm: Readers and Anonymous Characters in the Fourth Gospel* (Leiden: Brill, 1997). 愛弟子の解釈については次を参照のこと。Cf. James H. Charlesworth, *The Beloved Disciple: Whose Witness Validates the Gospel of John?* (Valley Forge, Pennsylvania: Trinity Press International, 1995).

61）Francis J. Moloney, *Belief in the World: Reading John 1-4* (Eugene, Oregon: Wipf & Stock Publishers, 1993):83-84.

62）2 章に出てくるのは「彼（イエス）の弟子たち」（ヨハ 2:2）であるので、「愛弟子」と特定されているわけではない。また、「愛弟子」が登場するのは 13 章以降である（13:23; 19:26; 20:2; 21:7; 21:20、Cf. 21:24）。

63）拙論「ヨハネ福音書における神殿モティーフとその意味」、221 頁。

64）しかし、もちろん福音書には、信従者から見てイエスが「兄」と呼ばれる存在になるとは書かれてはいない。Cf. トマスの告白。ヨハ 20:28「わたしの主、わたしの神よ」。

65）本論考では、ヨハネ福音書の構成を前半部（1-12 章）と後半部（13-21 章）に分けたので、この転換部は前半部の最後に含まれることになる。